思い出の空のいろ

―山麓南町図書館物語―

瑞貴くぬぎ

八月も半ばを過ぎた。
お盆が終ったというだけで、暑さはまだまだ衰えない。蝉たちが季節をひたむきに歌い上げる中で、二階の学習室には真剣な眼差しの高校生たちが毎日集い、椅子のほとんどを埋める。一階児童書室も、子供たちとその親御さんで賑やかだ。
図書館はお盆も通常営業なので、職員の休暇はそれぞれに分散して、八月九月のどこかで頂くようになる。

「萩君の所では、お盆に親戚の集まりとかあるの？」
午前中ずっと親子連れの貸し出しが続いていた僕と澤口さんも、お昼近くになってようやく区切りがついた。
「いえ、昔は叔父が従兄弟を連れて来て、みんなで遊んだりしましたけど……」
「今はもう？」
「そうですね。だんだんそういうのって」
気がつけば、集まる事がなくなっていた。そのきっかけもよく思い出せないままに。
「澤口さんの所は？」
「うちも同じ。昔は父親の実家に親戚みんなで集まって、賑やかに三日間を過ごして。で、

みんなが帰った後、私と両親とで祖父母の片付けを手伝うっていうのがいつもだったんだけど」

子供たちは部活や、自分の友達との時間を優先するようになってくる。親たちにしても、故郷を離れて年月を経るにしたがって、帰ろうという意識が薄くなってゆくのではないだろうか。賑やかでいられる時間は、きっとそれほど長くない。

さっきまでの親子連れと同じような夏休みを過ごしてきた一人だというのに、何だか忘れかけている。それほど遠い事でもないのに。

館内巡回から戻った木崎さんが、カウンター片隅におかれた単行本に気付き、怪訝な面持ちで手に取った。

「水濡れか……」

他と別にされていた理由に納得したのだろう。広いページ数に渡りこわばり、開き難くなった状態を確認する。

「受け取ったのは君かい？」

「ええ、さっき中年のご婦人が返却にみえたので」

「弁償の必要は伝えた？」

「大分困惑されていましたけど、分かって頂きました」
図書館の本は、借りた方が破損させてしまった時、それが修理可能ならばこちらで修理する。けれど修理が出来ないような傷み方であれば弁償をお願いする事となっている。その場合、利用者の方が同じ本を購入した上で、こちらまでお持ち頂くようになる。
今回は破損の程度がひどく、弁償相当と判断した。
「この本はどうするって？」
「弁償本を持って来た時点で代わりに持ち帰りたいそうです」
「そうか……」
本を閉じ、カウンター隅に戻す木崎さんに笑みがある。
「いい判断だった。こういう時どういう傷みが修理可能か、どういう状態だと弁償相当かを知る為には修理の知識も必要になる。一度誰か身近な人から、修理のプロセスも教わっておくといい」
「木崎さんと一緒になるのは珍しいですもんね」
「男手は少ないからな。なるべく分散させているんだろう。それに、そもそも俺は修理は出来ない」
職員の中でも修理の技術を持つ人は限られている。十数名いる中の二～三人くらいだろう

か？そのため、修理本はたまるばかり。今あるだけでも、完了させるのには半年はかかるだろうと言われている。当然に要修理本はそれを待つ事なく、次から次へと追加されてゆく。

職員用エレベーターが開き、若菜さんが空になったブックトラックを押しながら現れた。

「排架一台終了〜！次行きま〜す」

「若菜さんいいよ。交代しよ」

「まだ一台行っただけ。大丈夫だよ」

澤口さんの申し出に若菜さんは首を傾げた。

「６類の廃棄本リストまだ提出してないんでしょ？小堀さんから今朝聞いた」

「え〜と、うん。じゃあお願い」

「萩君の９類もまだ出てないよね」

「はい……」

「最初は決断難しいだろうけど。頑張って」

「はい」

古くなった本は定期的に廃棄される。うちの館では半年毎だ。九月に除籍する本を、それぞれの類の担当者がリストアップし、上の人の承諾を得て、廃棄という流れになる。捨てる

と言っても、それほど単純にはすまない。
「3類は提出してあるから」
そういう木崎さんに、澤口さんが『分かってます』というように頷く。
「4類も出しました」
僕は、夏休みの宿題の仕上げに追い込まれる生徒のような気分だ。
廃棄する基準はいくつかある。古くて傷みがはげしい本。何年も貸し出しされない本。情報が古くなった本。同作品が複数に収録されている時なども廃棄される。捨ててしまうのは勿体ないのだが、収納スペースに限りがある中、新刊を購入してゆく以上やむを得ない。
承認を得て除籍手続きが終了した廃棄本の中でも状態の良い物は機会を設け、希望者に配布される。『本のリサイクル展』と銘打ったその催しが開かれるのは年に二回。利用者の方達にとても人気がある。
「若菜さん、本の修理に関して、教えてくれませんか？」
僕は木崎さんに言われたままに、若菜さんにお願いをしてみる。
彼女は修理を習得している職員の一人だ。
「いいけど……どうしたの？」
申し出も唐突だったけれど、その様子も、何かあったと感じさせるには十分な雰囲気だっ

たのだろう。訝し気な彼女に説明をしようとする僕を遮るように、木崎さんが問題の返却本を開いて見せながら、出来事の流れを若菜さんに説明して聞かせた。
「ふ～ん。そういう訳」
経緯を理解した若菜さんがこちらを見る目は、何となく不機嫌だ。
「素直ね」
木崎さんがよろしく頼むというように言葉を添えると
「そうですね～」
それきり僕と目を合わせようともしないまま、ぼんやりとした口調で彼女は応じた。

午後は返却の嵐だった。廃棄本リストを作るどころではない。必死に手続きをこなし、排架に努め、ひと段落ついたのは午後三時近くになってからだった。
「返却をお願いします」
一人の初老の男性が何冊かの幼児向けの絵本を、カウンターの上に重ねたのは丁度そんな頃合いの事だ。
「あとこちらを、弁償させて頂きたい」
低く落ち着いた声色で、力強くそう申し出た。

六十代半ばといった所だろうか。白髪に太い眉、穏やかそうな目だ。白い無地のポロシャツにスラックスという姿は、カジュアルながらしっかりとした印象を受ける。

差し出された一冊は児童書だ。あまんきみこさんの『車のいろは空のいろ』、教科書にも掲載されていて、広く知られる作品だ。

「弁償……ですか？」

いきなりそう切り出された事に、木崎さんも少し押され気味に尋ねた。

開口一番自分から弁償を口にする人はあまりいない。それもこれ程に力強く。

「本を駄目にしてしまった。弁償させてもらいたい」

「どう駄目にされたのでしょう？」

木崎さんは本を手に取って開く。見た所かなり古い本だ。

「確かにひどくのど割れはしていますね。でもこれは修理可能です」

『のど割れ』とはページを綴じている部分が傷み、本がそこで二つに分かれるような開き方をするようになってしまう状態の事だ。

「のど割れもそうだが、この部分、孫がいたずら書きをしてしまったんだ。お盆に息子夫婦と孫達が遊びに来てね。この本も読んで聞かせた。その時は何事もなかったと思ったんだが、息子夫婦も帰り、いざ返却しようとした時に、このいたずら書きに気が付いたんだ。申し訳

ない、弁償させてもらいたい」
　男性の語り口は厳格さを伴い、滞りなく、丁寧なものだ。
「たしかにこれはまずいですね。でも……この本、随分これは古いな。ちょっと待って下さい」
　木崎さんはパソコンに向かうと蔵書データを調べ始めた。
「ああやっぱり。一九七二年購入となっています。どうしてこんな古い物が残っていたんだろう。この本は『車のいろは空のいろ・白いぼうし』というタイトルの新装版がすでに入っています。古い版のこの本を廃棄していなかったのが何かのミスではないかと思います。弁償は結構です。このままお返し下さい」
　そう言われた男性に何故か安堵の様子は見られなかった。戸惑う……いや、むしろ険しさを増したろうか。
「じゃあ、この本はどうなるのかな」
「随分と古い版です。このまま廃棄となると思います」
「廃棄か……分かった。じゃあ、取りあえず今日は貸し出しの延長をお願いしたい」
「延長をですか？」
「この一冊は弁償の件を確かめたかっただけで、返しに来た訳じゃない」

てっきり全部返却と思ってパソコン操作を始めていた木崎さんは慌てた。
「分かりました。では延長という事で。二週間後、九月五日が返却日となります」
男性は、受け取った本を手に提げていた紙袋に再び納め、そのまま真っ直ぐ退館していった。木崎さんの操作するパソコンの画面を横から覗く。男性の名は橘さんというようだ。
「せっかく弁償しなくていいと言っているのにな」
穏便な解決が図れると思った木崎さんは、釈然としない面持ちだ。

橘さんが再び来館したのはそれから一週間ほど後の事だった。
カウンターに座る僕を一瞥し「ちょっとすまないんだが」と前置きのように口にすると
「そちらの先日の男性、これを見て貰えますか」
奥で返却本の作業をしていた木崎さんに向かって声を掛け、差し出した本の確認を求めた。
「直してきたんだ。これなら文句ないと思う」
穏やかな声の中に、幾分の鋭さを込めながら、彼はその本を木崎さんに手渡す。
「いえ、あの、最初から文句など……」
そう言いながら手元の本を開き、目を落とす木崎さんの表情に、静かに驚きの色が浮かぶ。
「確かに修理されています」

「これならいいだろう」
橘さんは出来ばえに自信をのぞかせる。
「修理の経験がおありなんですね」
「東京の図書館にかつて勤めていた」
ああ、というため息を木崎さんが漏らす。
「けれど、何故このような？弁償の必要はないと言いました」
「この本は捨てないで欲しい」
「ですから、何故？」
「そうだな。まず比べてみて欲しい。ちょっと待っていてくれるかな」
『待っていてくれるか』と言った橘さんは、ぷいと向きを返すとそのまま児童書室に入って行き、ほとんど間を置く事なく一冊の本を手にして戻って来た。新装版の方の『車のいろは空のいろ　白いぼうし』、先日木崎さんが説明した本だ。
カウンターに並べて置かれた二冊は、新しい古いの差こそあれ、大きな違いは見られない。表紙の絵柄も基本同じだ。タイトルの書かれ方が少しだけ変えられている。内容はタクシー運転手の松井さんを主人公にした児童向けの連作短編集だ。
「一番有名な『白いぼうし』がいいだろう。比べてみようか」

二冊を開く事で、旧版と新版の何を比べようというのか、僕には…多分木崎さんにも、まだ判断が出来ずにいた。持って来た新装版を片手で開きつつ、もう片方の手でカウンターの上の旧版のページを開こうとするのだが、少し扱い難そうな様子だ。修理が施された本の背表紙は弾力を取り戻し、バネを取り換えてもらった玩具のように、力強くそのページを閉じ戻そうとする。

「こちらを私が開きますね」

若菜さんが声を掛け旧版の方に手を伸ばす。

「悪いね。助かります」

目次に目を走らせた彼女は、すぐに『白いぼうし』のページにたどり着いた。

「まず有名な書き出しの部分からいいかな？」

「これはレモンのにおいですか」ほりばたでのせたお客のしんしが、はなしかけました。「いいえ夏みかんですよ。」しんごうが赤なので、ブレーキをかけてから、松井さんはにこにこしてこたえます。

そこまで声に出して読んでみせた橘さんは顔を上げ

「今と同じ所を読んでみて貰っていいですか？」
穏やかに若菜さんの方を向く。この言葉を聞いて、橘さんの言う「比べる」というのがこの二冊を読み比べしたいのだという事がようやくはっきりとした。
「同じ所を読めばいいんですね」確認しながら若菜さんは、目的の場所に目を落とす。

「これはレモンのにおいですか」ほりばたでのせたお客のしんしが、はなしかけました。「いいえ夏みかんですよ。」シグナルが赤なので、ブレーキをかけてから、松井さんはにこにこして……

彼女はそこで止めると、本から顔を上げた。
「新装版では『しんごう』となっている部分が旧版では『シグナル』なんですね」
書き換えられた箇所に気付いて反応された事に、ずっとこわばっていた橘さんの表情が少しほぐれる。
「うん。そしてその夏みかんについてこんな風に説明している」

「あまりうれしかったので、いちばん大きいのを、この車にのせてきたのですよ。」

橘さんの意図を掴んだ若菜さんが、滑らかに後に続く。

「あんまりうれしかったので、いちばん大きいのをこの車にのっけてきたのですよ」

『あまりうれしかったので』と『あんまりうれしかったので』、『のせてきた』と『のっけてきた』。丁寧な言葉で書かれた新版と比べると、『あんまりうれしかったので』と語っている旧版の方が、田舎のお母さんからの贈り物への喜びを強く込めている印象だろうか。

さらに橘さんが続ける。

「そして、小さな帽子に気が付いた松井さんがそれをつまみ上げて、中に入っていた蝶を逃がしてしまう所。松井さんは心の中でこう思うんだ」

（ははあ、わざわざここにおいたんだな）

若菜さんが素早く旧版の同じ部分を読んでくれる。

（ちっ、わざとここにおいてたな）

この部分、旧版の松井さんは『ちっ』という舌打ちなどしてしまっている。新装版に比べると少しきつい印象だ。

橘さんが次に読んだのは帽子の下の蝶を逃がしてしまったあと、松井さんが何かを思い付いた所

ちょっとのあいだ、かたをすぼめてつったっていた松井さんはなにをおもいついたのか、いそいで車にもどりました。

若菜さんが後を追う。

ちょっとのあいだ、かたをすぼめてつったっていた松井さんは、なにをおもいついたのか……にやっとわらって車にもどりました。

橘さんは、そこを一つの区切りとしたのだろう。

「数ページの比較だが、これだけ違うんだ」
顔を上げ、本を一旦カウンターに置く。若菜さんもそれに倣った。僕達を見渡す橘さんは「これで伝わったろう」という目だ。たしかに随分違っている。
「松井さんは『にやっ』と笑うんですね……」
その言葉の意外な響きに、思わず小さな感想がこぼれる。今日の児童書が、このような場面に『にやっ』という言葉を使う事はあまり考えられないように思う。
「ああ、そうなんだ。今時の『にやっ』という言葉に感じるものと、この頃は少し違ったんだな」
そう言う橘さんは、今度は旧版を繰りながら「別の話にも『にやっ』と笑う所があるんだ……」と目的の箇所を探し始める。
「あった。これだ。一番最初に収録されている『小さなお客さん』という話の中。読んでみるよ」
それはパンクの修理をしていた松井さんの手助けをしてくれた小さな兄弟を、お礼に車に乗せてあげた後の場面だ。
「こんどここをからでとおったとき、またのせてやろうな」

松井さんがこういうとふたりの顔が、ぱあっとかがやきました。おたがいに顔を見あわせてにやっとわらいました

なるほど、たしかにここでも『にやっ』が登場する。こちらはさっきよりもさらに現代では使わないような使われ方だ。今こんな風に書いたなら、この子達は何か悪だくみでもしているかのような印象を持たれてしまうだろう。

僕は新装版を手に取り、同じ箇所を探してみる。

新装版では『にこっとわらいました』に変えられている。

「何か思いを秘めた、少し恰好いい笑顔のニュアンスが『にやっと笑う』には当時あったんだがな……」

印象としては「ニヒル」に少しさわやかさを混ぜ込めばいいのだろうか？いや、それでも説明しきれていない気がする。いずれにしても、新装版の『にこっ』とは違う雰囲気がそこにはあったという事なのだろう。

「両者に違いがある事は分かりました。けれど、それは作者ご本人による書き改めですよね。特にストーリーが変わった訳でもなく、あえてこだわる必要があるでしょうか？」

木崎さんはまだ腑に落ちない様子で橘さんを向く。

「確かにストーリーが変わった訳ではないけどな」
読み比べを無事に終えた為か、橘さんの語り口は幾分力が抜けたように聞こえる。
「今時、信号の事をシグナルなんて言う若い人はいないだろう」
「ええ、まあ」
その親しさにつられるように木崎さんが頷く。
「昔の書き方の方が良かったなんて言うつもりはないんだ。今の子には今の書き方でいい」
翻訳本を別にするなら、時代の変化にあわせて書き換えの行われた児童文学というのは一体どれくらいあるのだろう。少なくとも僕は、今まで知らなかった。
「けれどこの言葉で、自分たちは読んできたんだ。それがおしゃれだったし、決まっていた」
橘さんはそこで言葉を切り、言いためらうように、少しの間を置いた。
「帰りたくなる事があるんだ。自分たちが遊んだその場所に。そう思った時にはいつでも戻る事が出来る……本とはそういう物であって欲しい。だから、どうかこの本は捨てないでもらいたい」
話を区切りとみたのだろう、視線を落として話を聞いていた木崎さんが顔を上げた。
「お話は分かりました。けれど、廃棄するかどうかは、私には決定権はありません。9類担当者に任せる事となります。それでよろしいですか？」

「ああ。よろしく頼みます」
橘さんはカウンターの上の旧版を僕や木崎さんに向かって押し出すように小さく滑らせると、「それじゃ……」と頭を下げた。
「お嬢さんも……どうもありがとう」
若菜さんは静かに会釈を返した。
橘さんの後姿が館外に出る所を確かめるように窺っていた木崎さんは
「けれどそれは自分の蔵書でやるべき……」
小声で、ぽつりと言う。
「えっ？」
聞き取り難さに思わず木崎さんを向くと
「それは自分の蔵書でやるべき事だ、図書館に求める話じゃないだろう」
ため息に混ぜるように軽く天井を仰ぐ。
それから少し新しい空気を吸いたいとでも言うかのように
「館内を見回って来る」
とカウンターを出て行ってしまった。

僕は受け取った本を若菜さんに差し出してみた。
「この修理、若菜さんから見てどうですか？」
彼女は、今しがた手にしていた本に再度目を落とす。裏表に外観を眺め、次に表紙の見返し部分の付け根に触れ、さらにページの開き具合を確かめた。
「綺麗に修理されている。とても上手」
感心した若菜さんの口調に心がこもる。
「どんな風に修理してあるんですか？」
木崎さんの話では、のど割れがひどかった筈だ。
「そうね……例えば単にのど割れの修理だけであれば、その部分だけを接着しなおす事でも解決出来る。大抵の場合はそれでＯＫ。けれど、この本の場合は背のりまで固め直してある。だからほら、古い本だというのにとてもしっかりと開く感じでしょう？」
開き加減だけで言うなら、新装版と比べても決してひけを取らない印象だ。
「これをやる時にはまず裏表の見開きの部分にカッターを入れて、表紙と本体とを切り離すの」
「切り離すんですか？完全に？」
「そう。全く二つのパーツに切り離す。ここを見て」

確かに、橘さんの修理したその本の表紙を開いた部分には、カッターで切り取られた跡がある。
「思い切りがいりそうな作業ですね」
「うん。切り離してバラバラにして、折り綴じの糸に緩みがあれば縫い綴じ直す。それから……」
全体の流れを説明してくれる彼女の手が、上部の花布（はなぎれ）という小さな布の話となった時に止まった。
「天印が消えてる」
『天印』とは天小口に押された印の事だ。
うちの図書館の場合、旧館時代には天小口に蔵書印を黒いインクで押していた。現在では購入の年月日だけを赤いインクで押している。旧館時代の所蔵本であるこの本の天小口には、本当ならその黒色の蔵書印が押されていなければならない筈だ。なのにそれが全く見当たらなかった。
「やすりをかけたんですね」
小口を綺麗にするためにやすりをかける。僕もその程度の知識は持っていた。
「うん、そうなんだろうけど……」

彼女は何か引っかかるものをそこに感じている様子だ。
「ま、弁償の必要の有無を知りたいだけなら、この位で十分かな。他の故障については、また別の機会に話すから」
物思いに耽るとも見える面持ちで彼女は、僕との話を打ち切ると、本を手にしたままキャスター付の椅子を転がし、自分のポジションへ戻った。やはり何か気になっている様子だ。
そのまま黙ってページを中程から繰っていた若菜さんの指が、表紙近くまで戻った所で止まった。
「中のいたずら書きがなくなっている……」
独り言のようにそう言った彼女は、引いたばかりの椅子を再び僕の方に近付け、表紙を開いて見せた。お孫さんのいたずら書きは、見開きの紙をめくったすぐ裏の、白い面に書かれていたはずだという。
「ここ、綺麗に消えてる。最初から無かったみたいに」
見開きの部分が傷んだ場合それが無地の紙であれば、同色の紙を用意して張替え処置をする事もあるという。
「けど、この本は違う」
見開きの部分には物語に登場する街の地図が印刷されている。つまり代用は効かない。元

のままの紙である事は間違いない。
パタリと裏表紙まで大きくページを動かした彼女はそこから一枚ずつページを遡らせ、奥付の部分でその手を止めた。
パソコンに向かい、資料検索のキーを叩く。
「萩君、ここ見て」
若菜さんが示した奥付には『一九七三年第一七刷』と記されている。
「そして、こっち」
パソコン画面上の蔵書データには、木崎さんがあの時に言ったように一九七二年の購入と記載されている。
「購入年より印刷年の方が後って、あり得ない」
「この本は貸し出した本とは別の本という事ですか？」
「表紙は間違いなくうちのもの。ブッカーとラベルを張り替えるなんて、簡単な作業じゃ無い」
「つまり…？」
「本体と表紙とを切り離し、本体だけを別のものと入れ替えてある」
本体と表紙を切り離す……さっき若菜さんが言っていた作業だ。

「それを修理の際にやったんですか？」
「多分、そういう事」
「蔵書データの入力ミスって事はないですか？古い本に関しては、パソコンを導入してから順次入力したデータですから」
「おかしいのは天小口。君はやすりをかけたって言っていたけど、それにしては汚れが落ちた形跡がないの。そして中のいたずら書きは消えている。入れ替えがあったと考える方が、状況に則してる」
「この方が、より綺麗に修理出来ると思ったんでしょうか？」
図書館の本の傷みは激しかった。程度の良い古本を入手し、作り替えたのかと考えたのだ。
「それ、何のために？」
ことんと首を傾げる彼女の目が笑う。
何のため？たしかにそうだ。弁償の必要もないと言われている本を、無理に直す必要はない。状態の良い古書を手に入れたのなら、それを自分の蔵書にすればいい。図書館は最初から廃棄するとあの人に告げている。なのにあえて返却するのは賭けのようなものだ。
「さっきの橘さんの言葉の、どこかに嘘があるんでしょうか？」
僕は用心深く、控えめに、疑問を口にした。

「例えば、館所蔵の本が貴重な版……初版本だったりした為に手元に置きたくなったというのは……」
そこまで口にしたものの、これは自分で簡単に否定出来た。
「いえ、この本の初版は一九六八年。一九七三年の時点で一七刷だというなら、七二年に初版を購入するのは難しいですよね」
「それに目的がそんな事だったなら、返却した方の本を『処分するな』なんて言わないでしょ。それだけすり替えが見つかる危険が増す訳だし。証拠隠滅の意味でも、廃棄を望むはず」
見付けられて困る悪事であるなら、保存を強く訴えたりするのは確かに不自然だ。
「だから保存して欲しいという言葉に、決して嘘はなかった」
「けれどそれは二次的なもので、橘さんの一番の思いは、本の中身を交換する事にあった、という事ですね」
「きっと、そうだったんだと思う」
この本を代わりに提供する事で、もう一冊の方を手に入れたいと思う理由。
思い付く可能性は、限られてきていた。
「君の言う『貴重な本だから手元に置きたくなった』っていうのが、ある意味当たってるのかな」

若菜さんの言い回しがやさしく、暖かい。
「それは他の誰でもなく、唯一あの人にとって貴重な本だったという意味で？」
その言葉の真意を、僕はそっと確かめる。
「うん」
彼女もまた、僕の意図を探るような目だ。
二人は、どうやら同じ結論に達したようだった。
「お孫さんのいたずら書きが欲しかった……」
僕の言葉に、若菜さんは静かな笑みを浮かべながら、ゆっくりと頷いてみせた。

橘さんは最初から弁償する事を望んでいた。弁償する事で、代わりにあの本を手に入れたいと思っていたのだ。
「木崎さんから弁償の必要はないと言われた時に、橘さんは当てが外れてしまったんだと思う」
「延長を申し出て、とにかく自宅に持ち帰り、こんな方法を考え付いたんですね」
「うん。古書店かインターネットで代わりの品を急いで手に入れて、作業に取り掛かった……」

「思い出を大切にしたい人みたいでした」
「児童書室に入って行った時、迷わずに新装版を持って来たでしょう？最初から新しい版が置かれている事は知っていたんだよね」
「でも検索機で調べている時に、まだ古い版が閉架に残されている事に気付き、あえてそちらを借りて行ったんですね」
帰りたくなる時がある……きっと橘さんはその日、お孫さん達と一緒に、かつて自分が訪れたこの本の中の風景に、立ち戻りたくなったのだろう。

館内巡回に出ていた木崎さんが戻って来た。
「異常なし。ひと段落ついたな。俺はもう二階に戻るよ」
木崎さんはカウンターの向側から、日誌を手繰り寄せ巡回の記録を手早く書き込む。
「あの、木崎さん、橘さんの事なんですけど」
立ち去ろうとした後姿に声を掛ける。
「あの方の本に描かれていたお孫さんのいたずら書きってどんなものでした？」
「どんな？何が描いてあったかって事？そうだな、クレヨンで描かれたタコ？いや宇宙人のようかな。昔からある頭の下に足が付いたみたいな。……それがどうかした？」

「いえ、他に何か特徴は？」
「いや、これと言った絵ではなかったからな。ただの落書きだった」
「そうですか……ありがとうございました」
「ああ」
階段を上る後ろ姿が見えなくなった後、考える。宇宙人…か。古典的なタコ型の宇宙人、まだピンとくるイメージは浮かばない。
「私も見たよ。そのいたずら書き」
「見たんですか？」
「横から一瞬覗き見ただけたけどね。木崎さんの説明、言い方はひどいけど、それほど的を外してはいないかな。本当にそんな絵だった。どうかしたの？」
「どうかした」と聞かれて、明確に答えられるものとも違った。ただ、上手く捉えられない疑問が僕の中に残っていた。
「ただ単にお孫さんの描いた絵が欲しいというだけなら、こんな事までしなくても、簡単に手に入ると思うんです。仮にも元図書館職員です。ルールも、マナーも、全て心得ている。その橘さんが、どうしても手に入れたかったいたずら書きって、いったい何だろうって……そういう疑問です」

そう、少なくとも、こんな小細工をしてまでも手に入れたいくらいに。
「その絵に描かれていた顔はどんな表情でした」
「笑っていた。笑顔だったよ」
笑顔……
笑顔の下にタコの足のような何本もの線……
「あの、それはもしかして、こんな感じですか？」
僕は丸を描き、その中に笑い顔を描いたあと、その下に線を八本、曲がったのや真っ直ぐの、長いのや短いのを織り交ぜながら書き足してみせた。
「そうね。そんな感じだった。似ている」
やっぱり。
大切な絵。橘さんにとって、やはりそれはとても大切な絵だったのだ。
「宇宙人じゃないですよ。これ、見て下さい」
僕は自分の描いた絵を、若菜さんの方に向きを直してみせた。
「顔を描いた下に宇宙人の足のように並んでいる八本の線は文字……平仮名です」
「平仮名なの？あ……」
彼女はようやくその線が読み解けたようだった。

僕が、笑顔を描き、その下に文字を覚えたばかりの子供のような拙さで書いたのは
『じいじ』
……その一言だった。

「で、9類担当の萩君、この本はどうするの？」
『車のいろは空のいろ』を改めて手に取り、僕に向けて押し出してみせる。
「そうですね」
差し出されるままに本を手にした僕は、その重みと、表紙を包む透明なブッカーの艶やかな手触りとを掌で感じ取る。
「とても広く親しまれている作品の貴重な旧版です。書き換えの比較対象として資料としての価値もあります。ごく最近貸し出しもされていて、かつ『本の状態も良好』です……保存ですね」
「君だね」
「はい」
「廃棄本リスト、何とかしようね」
それを言われると言葉に詰まる。

「でも、それ若菜さんも」
「うん……」
すっかり二人で夏休みの宿題に追われる生徒となっている。
「若菜さん。本の修理の仕方を教えてくれませんか？」
「それはこの前聞いた。さっきも少し教えたし」
この話になると不機嫌が宿る。
彼女の口調は柔らかいけれど、ややつれなく、僕の方を見てもくれない。
「いえ、知識の話ではなく、技術を身に付けたいんです。僕も橘さんや若菜さんのように本を直せる人になりたいんです。……お願い、出来ませんか」
もう少し意外そうな顔をしてくれるかと思った。
聞こえているのかいないのか分からないような素振りで、若菜さんはパソコンの画面に向かい廃棄本のリストを作り続けている。
そして、ついと何かを思い付きでもしたかのように、作業の手を止め、カウンターの上で両の手を組むと、まだディスプレイを見つめたままの姿勢で
「いいですよ」と頷いた。

それから悪戯な眼差しで僕の目を覗き込み
「喜んで」
と一言つけ加えると、『にやっ』と笑ってみせた。

幾日となく続く危険なまでの暑さが、ニュースとして報じられる。
二階の学習スペースは、静けさと涼しさを求める学生達で今日もいっぱいだ。
川向こうの木立から絶え間なく蝉の声が聞こえる。クマゼミの声が大半だけれど夕刻を待てないヒグラシも混じる。
まだまだ、どこを見ても夏だ。
それでも少しずつ、少しずつではあるけれど、季節は確実に動いている……

参考文献

車のいろは空のいろ　一九六八年初版　あまんきみこ　ポプラ社
同　一九八七年第七六刷
同　一九九二年第九十刷

本の修理についての記述は、図書館勤務経験を持つ親族に取材し、執筆させて頂きました。が、その内容について一切の責は筆者にあります。

ご了承ください。

この作品の前作『本当のお姫さま　―山麓南町図書館物語―』を、函南町立図書館ホームページで読むことができます（ＰＤＦ版）。また、地域資料として貸出用冊子も所蔵しています。

函南町立図書館ホームページ（短編小説作品一覧）→

思い出の空のいろ　―山麓南町図書館物語―

2024 年 10 月 26 日　発行

著者　瑞貴くぬぎ

令和６年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・製本・発行　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使える
ものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。
ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。
また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

図書館カウンターに現れた男性。実直そうな彼の振舞いの中に生じた疑問を、萩、若菜、二人の司書が解き明かす。……あなたにとって、大切な思い出はなんですか？　人の思いを読み解く、山麓南町図書館シリーズ第二弾。